

新・十一人の少年

——それからの物語——

北村
想

登場人物（登場順）

コモモ

青木

灰色の盗賊 1・2・3

オサム

ユキオ

ケンジ

ベツポ

カイ

トモズミ

ヒオイ

灰色の盗賊 4・5

コモモの兄

『十一人の少年』の少年・少女たち 1・2・3・4・5（兼・少年

少女合唱団）

客（実は・・・）

セツ子（青木の妹、実は・・・）

下手村象

あの、橋掛かりのある四間四方のいつもの舞台。後座辺りに
檜田のオブジェ。
すみっこに丸い黒い眼鏡をかけた少女が独り、膝を抱えて座
っている。

橋掛かりを青年（青木）が来る。

青木 （思案しつつ、何やら口の中でボソボソ言ってるが、何を言っ
ているのかまるで聞こえない。やがてボソボソすら言わなくなり、
佇んで途方に暮れてしまう）

少女 それから、どうなるんですか？

青木 え！（驚いて、少女にふりむいた）

少女 その話のつづきです。

青木 （何をいわれているのか、戸惑ってしまう）

少女 いま、ボソボソと独りでやってらしたじやないですか。

青木 あなた、聞こえてたんですか、いまの、僕の独り言。

少女 はい。

青木 耳がいいんですね。

少女 その代わり、目は見えません。

青木 目が。

少女 ええ、盲です。

青木 そうですか・・・ああ、それでそんな眼鏡を。

少女 似合ってますか？

青木 ええ、なかなかのファッションですね。ああ、僕はですね、

少女 役所の青木さんですね。

青木 ！、たしかに、役所の衛生局に勤めている青木です。僕のこと
をどうして御存知なんです？

少女 ときどき、ここで、お芝居の稽古なさってるでしょ。

青木 ええ、ここで、はい、あの、時々、自主稽古をしております。

趣味で演劇のサークル活動をしているもので、す、か
ら・・・あの、あなたは？

少女 私？

青木 はい。

少女 私なの？

青木 ああ、その、名前は？

少女 名前。

青木 ええ。

少女 少女A。

青木 A？

少女 ええ。

青木 エー？（首をひねる）

少女 捕まれば、新聞には、そう書かれます。

青木 捕まるって？

少女 冗談。

青木 でしょうね、ハハハハハ・・

少女 コモモです。

青木 ・・ハハ、えっ？

少女 コモモといます。

青木 コモモ。

コモモ はい。

青木 名前、コモモさん、ですか。

コモモ ええ。名前、コモモです。小さな桃と書くらしいです。

青木 小さな桃。へーえ。（彼女をじっとみるが、見えないはずのコ

モモの視線を感じて、眼を逸らす）コモモさん、あなた、いつも

ここにいらつしやるんですか。

コモモ たいていは。

青木 それで、ここで僕がやってる科白の稽古を？

コモモ はい。

青木 そうですか。気がつかなかったなあ。

コモモ 変化（へんげ）の術を使って、気配を消していますから。

青木 え？

コモモ、立ち上がって、青木に近づいてくる。青木、やや、
たじろぐが。

コモモ （微笑む）

青木 （ほっとして、話しかけようとする）

コモモ （が、空かさず）少年たちが、次々と集まって、広場に作っ
たガラクタの船に乗って、灰色の盗賊たちのアジトへと出発して、
嵐の海に飲み込まれてしまって、それから、それからどうなるん
ですか？世界中の人々から想像力を盗んでいく、灰色の盗賊団と
の闘いは、それからどうなるんですか？

青木 それ、僕がいま稽古している芝居のストーリーですね。

コモモ はい。その、あれからのつづきです。

青木 その、あれからは、

コモモ ええ、そのあれから。

青木 それが、

コモモ どうなるんですか？いつも、途中で終わってしまうようだけ
ど。

青木 無いんです。

コモモ 無いって？

青木 あれから先の物語がないんです。

コモモ どうして？

青木 あれから先の物語を、盗まれてしまったからです。

音楽。高鳴って、すぐにオフ・バック。

コモモ 盗まれたって、誰に？

青木 あの物語の中に出てくる、灰色の盗賊団にです。

音楽、再び高鳴って、またオフ・バック。

青木 ひどい話だと思いませんか。物語のタイトルは『十一人の少年』というのですが、この作家というのが、まとまって最後まで脚本をくれたためしがないんです。今度もそうで、毎日出来上がった分だけ貰うと、僕たちはそれを稽古するんです。ところが、今回は物語がちょうどクライマックスにさしかかったところで、ふいに作者が行方不明に、いえ、蒸発というのかトンズラしたというのか、いなくなってしまうたんです。こういう書き置きを残して。(それらしきメモが書かれた紙片を出す)

コモモ (それひったくると)・・・

青木 読めるんですか？

コモモ わけがないでしょ。なんて書いてあるんですか。

青木 こう書いてあります。『やられた。物語を盗まれた』

音楽高まって、収束。

コモモ あの盗賊団が？

青木 そうです。

コモモ 何故、灰色の盗賊団が盗んだと？

青木 それは、

いつのまにか橋掛かりに、灰色のトックリ・ネックのセータ

―を着て、片方の手に葉巻を挟み、片方の手に銀色の手錠を下げた者たち（灰色の盗賊団1・2・3）が立っている。

1 それは、『頂いた。汝の物語、そっくり最後まで』と、そういうメモをその作家の使用せるワード・プロセッサに入力して残したからさ。

2 では、如何にして物語を盗んだか。

3 コンピューターの通信回線を利用して、ワープロソフトに侵入し、これを奪い去ったのだ。

1 我々にとつては、ワープロごときに侵入することなど、いとたやすきことだ。例えていえば、空間を歪めて移動するのがワープロなら、通信回線より侵入するのに、ワープロごときはワープロする入口のようなものだ。ワープロ、ワープロ、どうだ書いてみれば一目瞭然だろう。

青木 なるほど。で、あなた方？

2 何者と、訊ねたくば、すぐに答えてやる。

1・2・3 我々こそ、その灰色の盗賊団に他ならぬ。

青木 まさか。

コモモ 青木さん。

青木 コモモさん、この方々は、あなたのお知り合いですか？

コモモ いいえ。

1 『十一人の少年』から十と余年、物語の展開はかくも速くならざるを得なくなつた。本来ならば、我々の出番は、まだ二十分ばかり後だったろう。

2 これが、欲望の加速度だ。

青木・コモモ 加速度。

3 読者と観客の、欲望の加速度の増大が、我々をここに、こんなにも早く登場させた。

音楽、F・I

1 来い。青木、コモモ。

2 欲しくばやって来い。

3 あの物語の続きが欲しければ、やって来い、物語の中に。

1 と、言われれば分かるだろう。かつて『十一人の少年』がミヒヤエル・エンデの『モモ』を下敷きに書かれたならば、この物語は、虚構の中で物語を行き来する、別のエンデのファンタジイに似ているのだ。

- 2 とはいえ、すでに当時ですら、合わせ鏡のような、あのメタフィクションの仕掛けは新しいものではなかったのだが。
- 3 が、しかし、あえて使い古されたかのようなその手口を、この世界に持ち込んで、楽しんでみようじゃないか。
- 1 欲望の加速度に対抗して、お前たちの想像力が、いかほどの加速度を持ちえたのか、試してみようじゃないか。
- 2 すでに多くの想像力は、その翼を欲望の加速度に焼かれて灰となった。
- 3 したがって、我々は、欲望を超える、加速度のついた想像力というやつの出現を待たねばならない。
- 1 欲しくば来い。
- 2 物語のつづきが欲しければ。
- 3 青木、コモモ、お前たちに欲望の加速度を超える想像力が、もしあるのなら。
- 1・2・3 やって来い、物語の中に。

音楽、高鳴って、収束。

灰色の盗賊団 1・2・3 去る。

何事もなかったように、俯いてまたボソボソと芝居の科白を稽古し始める青木。

コモモ、青木の背中越しにゆっくりと眼鏡をとり、眼を開く。が、またゆっくりと眼鏡をかける。

コモモ それから、どうなるんですか？

青木 えっ？（今度はふりむかずに、顔を上げる）

音楽。

溶暗。

1

青木が、科白をボソボソとつぶやいている。ずっと後ろにコモモが座っている。

橋掛かりよりやって来たのは、青木の入っている演劇サークルの連中だ。順に、オサム、ユキオ、ケンジ、その後をサークルの部長であるベツポが、悪い足をステッキで庇いながらついて来ている。それぞれ、不思議なことに畳を一畳背負いながら。

ベッポ ああ、その辺だ。その辺りなんだ。
ユキオ でも、ここは。

ベッポ ああ、すぐ近くに河を渡る鉄橋があつて、そのガードの上を
電車の線路が走っているんだ。

オサム ここにお住まいなんですか。

ベッポ ああ、そうだよ。

ケンジ いやあ、ずいぶんとロマンチックだな。

ユキオ ここがかい。

ケンジ ああ、とても。

ユキオ ずいぶんと淋しいよ。

ケンジ 部長さんは、ここでお生まれですか。

ベッポ そうだ。ここで生まれた。

ケンジ じゃあ、死ぬのもここで。

ベッポ いや、どうせならビルの屋上で死にたいね。

ケンジ そら、ごらん。

ユキオ 何が？

オサム うん、そうだな。病院で生まれて、病院で死ぬことを考えれば、ガード下で生まれ、屋上で死ぬことはまるでファンタジーとしかいいようがない。

ケンジ そのとおり。

ユキオ 分からないね、そりゃ文学かい。

ベッポ まあ、いいじゃないか。さあ、そこだ。

指示された所へ、彼らは畳を敷いた。

ベッポ かつて、清掃局の職員の住居をガード下に設定したという理
由で、『十一人の少年』という戯曲は、差別の文学として、上演
を認められなかったこともある。彼らのうちいったい誰が知って
いただろうか、まるでそこが幻想の世界への入口であるかのように、
夕焼けの茜色に染まるガード下を、ただ独り見つめながら佇
んでいた少年のあったことを。いまは亡きエンデの『モモ』は、
廃墟に住む浮浪者の少女が主人公だ。ファンタジーというのは非
現実な世界の物語じゃあない。この世界こそが舞台なのだ。諸君、
コップ一杯の水に、水素原子と酸素原子の跳梁と、悠久の時を遡
ること三十五億年の生命誕生の瞬間と、海底に沈んだピアノの奏
でるセレナーデの泡(あぶく)を凝視したまえ。

ケンジ・ユキオ・オサム (拍手)

ベッポ いやいや、これは大袈裟に過ぎたかな。まあ、あがつてくれ

たまえ。今日は女房が留守で、何にもできないが、酒でも買ってこよう。(行こうとする)

ケンジ いや、それなら僕が。

ベッポ いや、いいんだケンジくん。酒屋はな、私が行くとツケがきくんだ。それにすぐそこだから。君たちは、まあ、てきとうにしていてくれたまえ。

と、ベッポは去る。

所在なさそうに座る彼ら。

夜汽車がとおる。零れる光。

ケンジ 夜汽車だ。

ユキオ 夜汽車は陰気だな。

ケンジ そんなことはないさ。光を散乱させて、まるでそれがエネルギーで走っている、未来の飛行機のようにじゃないか。

オサム 彼ら乗客は何処へと去りや、望郷の思いを胸に。

ユキオ (苦笑するが)それも文学かい。いや、これこそがファンタ

ジイの入口というわけだな。まあ、いいか。さて、どうするかな。

オサム 未来の飛行機という言葉で思い出した話があるぜ。聞かないか。

ユキオ オサムくんの作った与太話なら、ゴメンだよ。

オサム おいおい、これは、十五年前に読んだ漫画の話だ。

ユキオ 十五年前。記憶力がいいね。

オサム 昨夜、改めて読んだ。

ユキオ なんだ。

ケンジ 聞こうじゃないか。

ユキオ 長くないようにね。

オサム おいおい、俺の話は短くて面白いんだぜ。

ユキオ もったいぶらないようにってことさ。

オサム 分かってら。ベッポ部長の帰ってくるまでには終わる。

ユキオ

オサム SF漫画というやつだ。地球のいろんな動物が絶滅寸前になる。

ユキオ 例えば。

オサム 象とか、犀とか。

ユキオ ふんふん。

オサム その一对を冷凍保存して、月の人工タウンのロフトに貯蔵することにしたんだ。月は人間は住んではない。みなサイボーグだ。人間が住むには、まだ環境適応能力に欠けるといいうわけだ。

一月に一回の割で、地球から輸送船が着く。絶滅寸前の一对の動物を乗せて。さて、月のお祭の夜だ。サイボーグの連中たちにもお祭はあるんだ。その日も地球から、一对の動物を乗せて輸送船が着いた。サイボーグたちは、それを冷凍保存装置のままロフトに貯蔵すると、お祭に出かける。その途中で、地球がチカチカ光るのを見るんだ。

ユキオ ふんふん。地球で核戦争が始まったんだね。

ケンジ 送られてきた一对の動物というのが、人類。ですね。

オサム アタリ。

ユキオ 定石どおりのSFだね。

オサム しかし、十五年前だぜ。

ケンジ ええ、それなら、ずいぶんいい作品ですね。

ユキオ つまり、核戦争の驚異が日常的にあった時代だからだな。

夜汽車が通過する。

ケンジ 光のエネルギーです。あれはみんなエネルギーなんです。

ユキオ それなら、核だつてそうさ。

ケンジ E || m c² ですか。

オサム E || m c² か。アースのEとm cがマイ・コメディアン。つ

まり地球は我が愛する喜劇役者の二人乗りつてことかい。

哀しい汽笛と汽車の音。

オサム にしても、哀しい音だな。

ユキオ 会いに行くのさ、女がトランクを抱いて。自分の夢の中の恋人にね。その哀しさがあの音さ。

夜汽車が通り過ぎた。

オサム ・ ・ ・ つまり、その漫画のテーマというやつはだな。

ケンジ 科学によって、人類は滅び、また科学によって、人類は生き延びることもできるというやつですか。

ユキオ ケンジくんは科学に楽観的すぎるきらいがあるね。

ケンジ ユキオさんは科学には悲観的ですか。

ユキオ そんなことはないよ。ただ、僕は未来のことを考えるくらいには、過去の人類の甚大なる遺産のことも考えるべきだと、そう思うだけだよ。

オサム そのSF漫画のテーマは、時代のもつところの悲しみだな。
ユキオ オサムくんふうにいうと、いつだってテーマはそれだね。

ベッポが帰ってくる。

ベッポ (佇んでいる青木に気づいて) おや、青木くんじゃないか。

青木 あ、部長。どうしたんですか。こんなところで。

ベッポ どうもこうも、そこが私の家だよ。

青木 え、そうだったんですか。知らなかったな。

ベッポ よく来るのかい、この辺。

青木 そのガードの土手を下りた向こうに広場があるでしょ。

ベッポ ああ、廃れた空き地かね。あれは、もともと公園だったらし

いんだけどな。

青木 そうなんですか。あそこで、科白の稽古をよくやるんです。

ベッポ 今日はここですかね。

青木 夢中になって歩いてたら、こんなところまで、来たみたいですよ。

ベッポ まあ、君もあがれ。ちよūdい。(酒をみせる)

青木 先輩たち、来てるんですね。

ベッポ ただいま。

オサム、ケンジ、ユキオ、口々に「お帰りなさい」

ベッポ 議論沸騰かい。いいね、若い人は。

ユキオ 沸騰じゃないですよ。

オサム いま、火がついたばかりで、これから沸くんです。

ベッポ 青木くんが一緒だ。

ケンジ めずらしいね、青木くん。

青木 ちょっと、妹の具合が悪かったもんですから。

オサム 胸がいけないっていつてたっけ。

青木 いえ、

ケンジ 結核性のカリエスでしたね。

青木 ええ。とても可哀そうなんです。

ユキオ 元気になったらつれておいでよ。

オサム ああ、それがいい。噂に聞くとところじゃ、すこぶるの美形だ

そうじゃないか。

青木 それほどでもありません。噂はどれも大袈裟になって困ります。

オサム 駄目だ、だめだ。謙遜したって、顔に出てら。青木くんはほ

んと正直だ。

ユキオ 嘘がつけないってのも困りものだね。僕たちは上手に嘘をつくのが、仕事なんだからね。

オサム おい、そりゃ、役所での仕事かい。それとも役者としてのことかい。

ユキオ 役所での仕事に決まってるさ。役者は嘘なんかついちゃ駄目さ。

ベッポ さて、まず一杯いこうか。と、いつでも湯飲みが二つしかないんだが。(と、ポケットから湯飲み茶碗を出す)

ケンジ 僕は飲めませんから。

青木 僕も。

ベッポ うん。じゃあ、こうしよう。一つの湯飲みは酒だ。もう一つ

はお茶にしよう。互いに酒は私とオサムくとユキオくと、お

茶はケンジくと青木くとで回し飲んでくれたまえ。

オサム そりゃ、いい考えだ。

ユキオ そういうムードもいいね。

オサム そういうことが咄嗟に言えることが、ベッポ部長の歳の功なるんですね。

ベッポ お茶はこれだよ(懐から急須を出す)

オサム 上手い。

ケンジ 部長お得意の手品ですね。

オサム 素人のやる手品ってのは、うら哀しいところが嫌だが、部長のはユーモアがあつていいや。

ベッポ さあさ、ついでついで。

それぞれ、飲み始める。

ベッポ 飲みながら恐縮だが、ちょっと難しい懸案を検討しなくてはならん。

オサム おやおや、まるで役所で仕事の、くちぶりじゃないですか。

青木 あの、今度の芝居の脚本のつづきのことでしょうか。

ベッポ うん。

ケンジ やっぱり、下手村さんはみつかりませんか。

ベッポ こっちも役所だからね、そのツテでいろいろ捜したけれど、どうも雲を霞のごとくだねえ。

ユキオ しかし、公演まで一月足らずですから、こっちがもう勝手に作るしかないでしょう。合作ということでもいいじゃないですか。

ベッポ うん、それも止むを得ないね。何かいい案はあるかね。

ケンジ 考えましょう。

オサム そうだ、しばし、沈黙考だ。禅の道元曰く『ただ座れ』だ。僕たちはこうやって座ってるんだから、ちよūdい。道元はまた曰く、

ユキオ 沈黙考なら、黙るがいいんだ。オサムくんは、沈黙考と言いつつ、それを語るからな。

オサム 分かった分かった。ユキオちゃんのいうとおりだ。

彼らは、それぞれ懸案の件を考えているらしい。

と、橋掛かりを雛壇を運びながら、謡つつやって来る者が四人。彼らの装束からすると、あの灰色の盗賊団であるのだが、四人がかりで雛壇を運ぶとは、すなわち、雛段上に、もう一人、乗っかっている者がいるからだ。灰色のハーフ・コートにカンカン帽子をおつに被り、やはり葉巻をふかしながら、洒落たステッキを小脇に抱えている。

謡り果てのない お話が なぜつづく

合わせ鏡の 物語が なぜつづく

この世がそうであるからか

この俺のお脳(つむ)が そうなのか

マザーグースのいうのには

マヒルのアヒルはニヒルとさ

それがヒルならまだましさ

なぜなら他人(ひと)の血吸うからさ

果てのない お話が なぜつづく

合わせ鏡の 物語が なぜつづく

壇上の者 やめろ、その歌。陰気だ。

運んでいる四人 はい。

壇上の者 降ろせ、ここでいい。

運んでいる四人 はい。

壇上の者 ヒオイとトモズミを残して、後は帰れ。

灰色4・5 私たちの、後の出番の保証は？

壇上の者 知るもんか。これはネバー・エンディング・ストーリーではない。果てし無い物語ではなくて、先の保証のない物語だ。俺にも分かん。

4 しかし、私はノルマのチケットを40枚も売りました。

5 私だって、50枚。

壇上の者 俺の憂鬱が怒声に変わる前に帰れ。

4・5 しつつれいします。(去る)

ヒオイ (壇上の者に) カイさま。

カイ 何だ。

ヒオイ ゆうづつが土星に変わるといふのは、宵の明星である金星が、
輪っかのある土星に姿を変えるといふ、天体現象でしょうか。

カイ 何の話？

ヒオイ ゆうづつが土星に変わると、いまおっしゃいましたから。

カイ ゆうづつじゃあ、ない。憂鬱だ。土星ではない、怒りの声の怒

声だ。

ヒオイ なるほど、明晰なる言葉だ。

カイ 明晰でないのは、いつもお前の問いかげだ。

ヒオイ 御容赦を。

カイ ノルマで思い出した。今月のお前たちのノルマは？

トモズミ チケットのですか？

カイ 楽屋落ちを二度も出すな。

ヒオイ はい、それが。

カイ 駄目のようだな。

トモズミ ノルマがきつくて。

カイ ノルマがきついのではない。ここ十年、ノルマは変わっていない。
い。変わったのは世間だ。この荒廃した脳髓どもの世界を見よ。

あたかも、我々が、奪い尽くすだけ奪い尽くしたかのようなこと
くだ。これほどまでに、簡単なのか。人から想像力を奪いとること

とは、かくもたやすいことなのか。何故、再生産出来ぬ。これで

は、我々すら干上がってしまうではないか。

トモズミ 消費の時代とかで。

カイ 消費は生産であると、マルクスも言ってるぞ。

ヒオイ 僭越ながら、マルクスは終わったらしいです。

カイ 終わっちゃったの？

ヒオイ とか、聞いております。

カイ いつのまに？

ヒオイ 職業安定所に失業の届けでも出たんじゃないでしょうか。

カイ マルクスじゃなければ、いまは、何だ？

トモズミ さしずめ、ニーチェでしょうか。

カイ ニヒリズムか。他には？

トモズミ 何やら、相対主義とかで。

カイ そんな主義があつてたまるか。右があれば左がある。上があれば
下もある。表があれば裏もある。あなたが在れば俺も在る。こ
うするならば、ああもして、そう言うならばどうとも言える。そ

んなあたりまえのことを主義などと言われてたまるか。

トモズミ カイさまは絶対主義で？

カイ 愚か者。それこそ、相対主義の相対じゃないか。

ヒオイ 学生時代はよくやりました。

カイ 何を？

ヒオイ 早引き。

カイ ヒオイくん、君の言葉は、こと明晰を欠いているな。

ヒオイ 書いているとは、私、何か筆記しましたか？

カイ それ、それだ。欠落の欠くを、手紙でも書くのだと聞く耳と、

相対を早引きの早退というその口だ。明晰という俺の言葉も名所
旧蹟のことだと思ってるんだろ。

ヒオイ そうじゃないんですか？

カイ 駄目だ。ノルマどころの話ではない。お前たちの言動から察するに、事は我々の存亡にかかわる。事態は我々の脳髓にまで及んでいる。急がねば。急いで、盗まねば、新鮮な想像力を。でない
と、俺もお前たちのように、脳髓の演算中枢を駄洒落のデーター
ベースに支配されてしまう。

と、カイは天を望み。ふいに、

カイ 雨の匂いだ。4番、5番、傘を持って。出番をやる。

橋掛かりより、傘を両手に灰色の4・5走り来て、傘をカイ、
トモズミ、ヒオイに投げ、おのれ等も、それを開く。

カイ (傘を開いて) 『その群れを雨に咲く花と歌うなら黒き傘のメ
ロディとは何』

カイの謡に合わせて、ヒオイ、トモズミ、灰色4・5が舞う。

ヒオイ、トモズミ、灰色4・5 (掛け声) 東！

カイ ㇿ東に吹く風あれば

ヒオイ、トモズミ、灰色4・5 (掛け声) 西！

カイ ㇿ西に吹く風もある

ヒオイ、トモズミ、灰色4・5 (掛け声) 南！

カイ ㇿ南からの風あれば

ヒオイ、トモズミ、灰色4・5 (掛け声) 北！

カイ ㇿ北の風もある

風のきまぐれが 雨の行方を変えるなら
言葉のでまかせが 話の先ゆきを変えるだろう

聞け トタン屋根が風に歌っている

ハタン ハタン ハタン・・・

ヒオイ、トモズミ、灰色4・5 (掛け声) 東西南北

カイ ㊦東西南北 何れの街も ハタン ハタンと吠えたてる

ベッポ 破綻してもいい。考える勇気を持つことだよ。

青木 といっても、なかなか難しいもんですね。いったい、十一人の
少年たちをどうすればいいんでしょうか。

オサム 嵐の中に散り散りとなるか。

ユキオ 嵐にうち克つて、さらに進むか。

ケンジ 嵐をうまく治めてしまうか。

ベッポ それだけで三通りの話になってしまうね。

オサム 将棋や囲碁のプロ棋士たちが、百手も先をよむというのは、
嘘らしいな。

青木 そうなんですか。

オサム 三手先を百通りほどよむらしい。

ユキオ こっちは、たかが三通りしか出てないんだ。あと九十七ばか
り考えるのかい。

ケンジ なるだけ、やってみませんか。

カイがベッポたちを指差した。トモズミとヒオイに、行けと
いう合図だ。

ヒオイ、トモズミ、ベッポの家の表に立つ。

ヒオイ・トモズミ 今晚わ

ベッポ 客かな。

青木 はい、どなたですか。

ヒオイ 調査員でございます。

青木 だ、そうですよ。

ベッポ 調査員？こんな夜中にかい。

トモズミ 本日は、サービスでやって参りました。

青木 何の調査でしょう。

ヒオイ 入って、よござんすか。

青木 どうしましょう。

ベッポ 入ってもらうか。私たちも日頃、市民の方々に調査でお世話
になっっているから、こういうことには協力しておかんな。

青木 どうぞ。

ヒオイ・トモズミ 失礼いたします。(あがり込んだ)

ケンジ 行政の調査ですか？

ヒオイ いえ、民間の。

トモズミ といいですか、私どもは第4セクターのものです。

ユキオ へーえ、で、何を調べるの？

ヒオイ では、早速調査に入らせていただきます。えーと、最近、悪

い「思い」はありませんか？

ケンジ のっけに難解な質問ですね。

オサム 悪い思いつけという、気分を害する経験ってことかな。

トモズミ いえいえ、単に「思い」です。

ヒオイ 心の中に生じる「思い」です。

ユキオ じゃあ、邪(よこしま)な考えっていうやつかい。

トモズミ とも、違います。

ケンジ ますます難しいアンケートですね。

ヒオイ いえいえ、簡単なことです。

トモズミ 悪い「思い」というのは、思い通りにならない「思い」のことです。

オサム なんだい、そんなことなら、しょっちゅうさ。

ヒオイ しょっちゅう。(と書き込む) えーと、そちらさまのお名前
は？

オサム 僕はオサムですが。

ヒオイ オサム。(と、また書き込む)

トモズミ 貴方様は？

ユキオ ユキオだけど。

トモズミ 悪い「思い」のほうは？

ユキオ たまにはあるけど、僕はけっこう、これでも我を通すほうだ
からね。

トモズミ たまにはあると(書き込む) その頻度は？

ユキオ 乗ろうとした電車に予定通り乗れないなんてことはないが、
相手のあることではね、向こうがかってに約束を破ったりとか、

そういうのなら、よくあるね。

トモズミ はいはい。(書き込む)

ヒオイ 貴方は？

ケンジ ケンジといいますが、思い通りになんて、なかなかありませんよ。だから、お釈迦様は、人生は苦しみだって仰ったんですか
ら。

ヒオイ そう、そうなんですよねえ。(喜んで、書き込む)

トモズミ そちらは。

ベッポ 我が人生をふりかえって、思い通りになったことなんて、数えてみても、片手の指で足りるんじゃないかねえ。

トモズミ (嬉々として) そうでございますよねえ。お名前は？

ベッポ ベッポといいます。

トモズミ ベッポさま。(書き込む)

青木 僕は青木です。思い通りになるなんて、1割くらいです。

ヒオイ・トモズミ はいはい。(書き込む)

ヒオイ ところで、当社のこの保険でございますが、これは『思う保険』と申しまして、そういった思い通りにならない「思い」を掛けていただきました。満期になりますと、なんでも思い通りになる「思い」をお返ししますんですが。

ユキオ 何だ、保険の勧誘か。

オサム しかし、そりゃ、めずらしい保険だな。とすると、何かい、その保険に加入すれば、こっちの思ったとおりにならない、悪い思いというやつが無くなるってのかい。

ヒオイ・トモズミ その通りでございます。

オサム じゃあ、何でも思い通りになるってわけか。

ヒオイ いえいえ、そうはうまくいきません。ただ、悪い「思い」はうーんと少なくなります、はい。

ケンジ それ、一口幾らなんですか？

ヒオイ ほっほっほ。

トモズミ お金なんぞ要りません。

ヒオイ この契約書にサインいただければ、月々、悪い「思い」を頂戴に参上、いえいえ、もう自動的に、銀行落としのごとく、悪い「思い」がこちらにダウンいたします。

ベッポ 無料(タダ)なの？

トモズミ ええ、お金とは、一切関係ないんです。

青木 不思議な保険ですね。そんなものなら、誰でも入るでしょう。

ヒオイ いやあ、ところが、昨今は、私どもも大変きつうございましてね。

トモズミ というのも、最近のお人は、何でも思い通りになっちゃうっていう人が多うございまして、まあ、金さえあればってところなんです。

オサム まあ、ある程度はそうだろうな。

ヒオイ そこで、私どもも、欲望のコントロールをですね、

カイ それは企業秘密だ！

ヒオイ おっと、その、思いの方向を変えた新しい保険をお薦めして

おる次第なんです。

トモズミ つまり、世の中にはお金ではどうしようもないこともある、ということをお分かり頂いて。

ヒオイ たとえば、『私とは何だろう』とか、『人は死んだらどうなる』とか、『生きる意味とは何か』とか、そういう答えのなかなか出ない「思い」をすら、保険の対象としているわけなんです。

ユキオ で、満期になると、その答えが返ってくるってか？

ヒオイ・トモズミ その通りです。

オサム へーえ、そんな保険があるのか。

ユキオ そんなものいつ出来たんだ。

ヒオイ 最近です。サイキンといってもウイルスじゃありませんよひひひ。

ベッポ うん、無料ってのは、いいね。

ユキオ 興味深いね。

オサム 好奇心をそそられるね。

ケンジ 僕は、サインしてもいいような気になってきましたよ。

ベッポ よし、わしは一口、騙されたと思って入ってみるか。

ヒオイ・トモズミ ありがとうございます。

オサム 悪い思いは誰だって御免だからな。

ヒオイ (青木に) こちらさんは？

青木 満期になると、いい思いが叶うんですね。

ヒオイ はい。

青木 たとえば、僕には、病気の妹がいるんですが、彼女が健康になるとか？

ヒオイ・トモズミ もちろんでございます。

青木 満期まで、何年ですか？

ヒオイ・トモズミ わずか、一年。

ベッポ 以下一同 一年。

ユキオ そりゃいい、俺も試しに入るかな。

ヒオイ・トモズミ (青木に) こちらさんは？

青木 それなら、僕も、

と、それまで座っていたコモモが立ち上がる。

コモモ 青木さん、誰と話しているんです？

音楽。

青木 え？

コモモ 生臭い風が、いやな音をたてて吹いているのに、この雨の中、誰と話しているんですか？

青木 コモモさん、ほら、保険の人ですよ。

コモモ 青木さん、誰もいないよ。誰もいないんだよ。

青木 だって、

コモモ あんたは目明きだけど、めくらにしか見えないものもあるんだ。そこには、邪悪な空気が渦巻いているだけだ。

青木 コモモさん。

音楽。高鳴って、

溶暗。

2

青木が、科白を諳んじながら立っている。コモモが例の場所でそれを聞いている。

科白が途切れて・・・

コモモ それから、それからどうなるんですか？

青木 え、(と、コモモを見て、急に恥ずかしくなったのか) あ、どうもすみません。人がいるとは思ってませんでした。

立ち去ってしまう。青木。

擦れ違いに橋掛かりを来る、皮ジャンを着たヤクザふうの男。

コモモのところに来て。

男 コモモ、

コモモ 兄さん。

兄 仕事だ。

コモモ こないだのような、ひどい客じゃないよね。

兄 こないだって？

コモモ こないだのお客さん、私に手錠かけて、猿轡(さるぐつわ)して、

兄 ああ、そういうのも、いま流行ってた。ソフトSMってやつだ。少しは我慢しないと。誰だって、それくらいはやらせるんだから。

コモモ でも、

兄 でもも、すももあるか。お前はコモモだろ。

コモモ 兄さん。

兄 危なそうだったら、ほら、携帯鳴らせ。すぐに飛んできてやっから。

コモモ ほんとに？

兄 ほんとだよ。この世でたった二人の兄妹じゃないか。二人して手をとりながら、生きてきたんじゃないか。

コモモ (泣く)

兄 泣くなコモモ。

橋掛かりから少年少女合唱団が、『人生の並木道』を歌いつつ登場。

コモモ この方々は？

兄 俺がお前のために雇ってやった合唱団の方々だ。どうだ、何か一曲歌ってもらおうか。なんなら、お前の歌のバック・コーラスをしてもらったっていい。

コモモ 家庭用の通信カラオケみたいだね。

兄 どうだ、歌うかい。

コモモ そんな気分じゃないから。

兄 あんた方、歌い終わったなら帰っていいぞ。

少年少女合唱団、『人生の並木道』を歌いながら去る。

兄 コモモ。

コモモ え？

兄 人生が並木道だって知ってたか。

コモモ (首をふる) ううん。

兄 人生は並木道なんだな。

コモモ ほんとに？

兄 だって、そういうふうにならわっているんだもん。

コモモ 知らなかった。

兄 雪も降り降り夜路のはても やがてかがやくあけぼのに わが世の春はきつと来る。

コモモ 生きてゆこうよ希望に燃えて 愛の口笛高らかに この人生の並木道。

兄 生きていこうな。

コモモ うん。

兄 何だか分かんないけどなあ。

コモモ (強く) はい。

兄 (ひよいと話題を転換して現実にもどる) 客をそこまで連れて来てるんだ。(橋掛かりの奥の客に) こっちです。どうぞ。

客らしい男が来る。

客 ここって、ここですんの？

兄 ええ、ここは誰も来ない、公園ですから。

客 ホテルは駄目なの？

兄 なにぶん、こいつは目が不自由なものですから、あんまり他のところでは。

客 そうか、まあいいか。青姦てのも一興だな。

兄 (ゴム製品を渡して) これ、ゴムです。つけて下さい。それから

接吻は駄目ということになってます。

客 (コモモを見て) まだ子供みたいだけど。

兄 いえ、もう十七ですから。

客 ふーん、可愛いね。キスは駄目なのか。

兄 はい。

客 ふーん。

兄 あの、前金でことで。

客 (財布出して、万札を三枚渡す)

兄 あの、一枚多いですけど。

客 (小声で) キス、いいだろ。

兄 ……まあ、そういうことでしたら。じゃあ、きつちり45分で、戻ってきますから。よろしく。

客 ほんとに誰も来ないだろうね。

兄 ええ、誰も、はい。じゃあ、コモモ、兄ちゃん行くから。しっかりな。(去る)

客 (ズボンを脱いで) 45分なんてすぐだからな。フェラで15分、残り30分で本番の、二回いけるかなあ。まず、キスからいくか。

コモモ 口は駄目です。

客 一枚余計に払ったんだからさ。

無理に接吻しようとする客、拒むコモモ。眼鏡が落ちる。

と、青木が現れて、コモモから客を引き離す。

客 な、何すんだ。

青木 あんたこそ、何してんだ。

客 馬鹿だな、これは、

青木 これは、何だ？

客 だから、三万円なんだよ。そういえば分かるだろ。

青木 分かるもんか。

客 ちえっ、しょうがないな。(ズボンを履いて)ポン引きのヤツに
来てもらわなきゃ。金、返してもらおうぞ。誰も来ないっていつた
くせに。(去る)

青木 いったい、なんてヤツだ。

コモモ いいんです青木さん。

青木 え？僕の名前、どうして知ってるんです。

コモモ いつも、ここでお芝居の稽古、独りでおやりですよね。

青木 はい。

コモモ 私もいつもここにいますから。

青木 そうだったんですか。気づかなかったな。

コモモ 気づかれないようにいるんです。こんな仕事してるもんです
から。

青木 こんな仕事って。

コモモ (落ちた眼鏡を捜している)

青木 (眼鏡をひろって、渡してやりながら)目が悪いんですか。

コモモ はい。(眼鏡をかける)見えません。

青木 そうなんですか。

コモモ あの続きはどうなるんですか。

青木 続きって？

コモモ ここ何日か、同じところばかりの科白で、物語が先に進みま
せんね。

青木 ああ、いま僕が稽古しているあの話ですか。さあ、どうなるん
だろうなあ。

コモモ 少年たちが、次々と集まって、広場に作ったガラクタの船に
乗って、灰色の盗賊たちのアジトへと出発して、嵐の海に飲み込
まれてしまって、それから、それからどうなるんですか？世界中
の人々から想像力を盗んでいく、灰色の盗賊団との闘いは、それ
からどうなるんですか？

青木 どうなるんだろうなあ。

コモモ 少年たちが船に乗る広場も、ちょうど、こんな場所ですね。

青木 ええ、そうですね・・・そうだな、こんな場所です。

コモモ ここで船に乗るんですよ。

青木 十一人の少年たちは、自分たちの想像力で造り出した船に乗り

込むと、空想の海へと航海したのでした。しかし、なんというこ
とでしょう、彼らをまず待ち受けていたのは、予期せぬ大きな嵐
だったのです。

音楽。嵐の唸り声。

オブジェかと思えた、楢田の輪が舞台に下りてくる。それを
船に見立てて、少年少女たちが、乗り込む。青木、コモモ、
ベツポ、オサム、ユキオ、ケンジを含めて、ちょうど十一人
だ。

3

嵐の海に大きく揺れる船。

少年1 帆を下ろせ。

少女2 何かにしっかつかまれ。

少年3 自分をロープで縛りつけるんだ。

青木 コモモさん聞こえますか。

コモモ 聞こえます。

青木 ここからです。ここから先の物語が無いんです。

コモモ ないって？

青木 ないって、ないんです。

嵐が突然、ピタリと止む。

ユキオ 何だいこれは。

オサム ほほう、こういうこともあるんだ。

青木 嵐はどうなったんですか？

ケンジ 消えましたね。すっかりなくなりました。

青木 どうしてです。

オサム 嵐が止むってのは、読み筋になかったな。

ユキオ まさか、そんなことは考えもしなかったね。

ケンジ 考えられるとすれば、さいぜんの嵐と等しいエネルギーが、

嵐の中心で働いたということでしょう。

青木 どういうことです。

ケンジ 作用と反作用です。エネルギーどうしの力の打ち消しあいと
いうことです。

ユキオ そういう、地震の終わった後の地震学者の論評まがいの言葉

はどうでもいいんだ。いったい、これで、我々はどうなるんだい。オサム 俺たちは十一人の少年だぜ。これで、嵐と闘わなければ、いったい何なんだ。

ケンジ 船長に相談しましょう。

青木 船長って？

ユキオ そういや、船長が誰かも決めてなかったね。

ケンジ 当然、ベッポさんだと思っちゃいましたから。

ベッポ 私のような年寄りでいいのかい。

ケンジ 年功者だから、いいんですよ。

ベッポ しかし、たいていのこういう物語では、私のようなものは、

コック長か何かで、船長は、もっと若いぞ。

ユキオ それもそうだね。

ケンジ かといって、みんな若いから。

オサム おいおい、船長がいなくちゃ、船は進まないぞ。

ケンジ じゃあ、決めましょう、みんなして。

ユキオ 民主的にかい。やだね、僕は。そういうのは大嫌いだ。

オサム そうだな。船頭多くして、船、山に登るだからな。

ベッポ 青木くん、君がやりたまえ。

青木 え、僕がですか。

ベッポ そうだ。

青木 どうして僕が。僕のような頼り無いのが、そんな。

ベッポ こういう場合は、いちばん頼りなさそうなのが適任なんだ。

青木 何故です。

ベッポ 水滸伝という中国古典文学を知っているかね。

青木 はい、聞いたことはあります。

ユキオ 百八人の豪傑が梁山泊に立て籠もる話ですね。たしか、作者

は不明だけど、中国を知るためには、『四書』『五経』よりも『水

滸伝』を読めといわれるくらいなの、有名な古典文学ですね。

ベッポ そうそう、その通り。この百八人き豪傑の頭（かしら）が宋

江という男なんだが、梁山泊に立て籠もってからは、何度、朝廷

の討伐にあつてもびくともせず、全ての戦に勝利して、その度に

敵の大將を生け捕りにするんだから、どんなにすごい男かと思う

と、さにあらず、これが無能を絵に描いたような男でな。

青木 無能を絵に。

ベッポ 田舎の役所の書記をしていたらしく、力は鶏より劣り、兵法

の本を読む才能もない男なんだ。

青木 それが、どうして、豪傑の頭目に？

ベッポ そこなんだよ、青木くん。この宋江という男は、自身の無能

を自覚しておったんだ。だから、自分の才覚を他人と比較することがない。だから、他人と競争するということがない。百八人の豪傑は全て自分より、才能も力もあると、信じて疑っていない。

部下を使うにこれほど適任の者はいないんだ。

オサム 道教の思想ですね。無能を自覚したる者ほど優れた者はいない。

ベッポ だから、青木くん、君が船長だ。

青木 それって、喜んでいいことなんですか。

ベッポ どちらでも、好きに考えればよろしい。

ユキオ さあ、船長、これから先の船の行く先を決めてください。

青木 そうですね。まず、望遠観測のための見張りをたてましょう。

周囲に何があるか、調べましょう。

ケンジ それは、いいアイデアです。ここが、どんなところだか知るのが、いまのところ、いちばん大事ですよ。青木船長、なかなかたいしたもんです。

青木 いやあ、

ケンジ で、その役は誰に？

青木 コモモさんがいいでしょう。

全員？

青木 彼女は見てのとおり、眼がみえません。だから、見るということに関しては、いちばん無能かも知れません。でも、無能の僕が船長をやっているんですから、ここはコモモさんの見えない眼で、見てもらいましょう。

オサム そいつは、ステキな考えだ。

ユキオ いい、アイデアですね、船長。

ケンジ とてもファンタジイですよ、青木くん。

青木 いやあ、水滸伝に做っただけですよ。じゃあ、コモモさん、前に出て、前方の海に何が見えるか、見てください。

コモモ (ところが) 青木さん、いえ、船長。

青木 どうしました？

コモモ 病人のようです。

なるほど、少女の一人が倒れている。
駆け寄るみなさん。

青木 どうしました。(抱え起こすと) あっ、お前は、ベッポ 誰だね。

青木 妹です。僕の妹のセツ子です。

セツ子 兄さん。

青木 お前、どうしてこんなところに出てきたんだ。寝ていなくっちゃ駄目じゃないか。

セツ子 だって、私も船に乗りたかったんだもの。

青木 ひどい熱だ。誰か医者を。

ユキオ といっても、ここはもう空想の海の中だよ。医者なんか、いないよ。

ベッポ ケンジくん、君、船医の役をやってみるかね。

ケンジ 船医、ですか。はい。じゃあ、ちよつと脈を。・・・うん、心臓はまだ大丈夫のようです。(ポケットから何か出して)これを煎じてくれませんか。

青木 何です、それは。

ケンジ 柳の皮を干したものです。煎じると、アセチルサリチル酸が抽出できるはずです。

オサム アスピリンか。

ケンジ はい。

青木 誰か、煎じてくれたまえ。

少年少女、受け取って、煎じるふう。

青木 すぐに引き返しましょう。

ユキオ もどるのかい。

青木 病人をこのままにして、進むわけにはいきません。

オサム といっても、

青木 帰りましょう。

オサム 船長、お言葉ではありませんが、ここが何処だか分からないのに、いったいどっちへ引き返せばいいのでしょうか。

青木 あ、そうか。

セツ子 いいんです、船長。すぐに良くなりますから、進んで下さい。

青木 でも。

セツ子 いいえ、進むんです。ここが何処なのか分からないのなら、進むのも退くのも同じことじゃないですか。

青木 そうか。それもそうだ。進むも退くも同じだ。

セツ子 何処だか分からないところに、私たちはいるんですよ。だって、ただもう進むしかありません。

青木 しかし、

ケンジ 船長。進む退くは、ここではあまり問題じゃないんです。この妹さんの病気の医療処置こそが、緊急です。

青木 うん。

ケンジ 何とかしてみます。僕も、妹を亡くしているんです。

ベッポ ああ、そうだったね。

ケンジ でも、船長。いえ、青木くん、この人はホントウに君の妹さんですか？

青木 まさか、ニセモノだっていうんですか。

ケンジ 違います。僕には、この女性はあなたの妹さんではなく、姉さんのように思えるのです。

青木 姉さん？

ケンジ 同じ、女性の兄妹をもった者の勘なんです。

青木 そんなことは。

セツ子 いいえ、そのとおりです。私は、この船長の、青木の姉です。

青木 え？

セツ子 あなたは知らなかったんですよ。私はあなたの妹ではなく、あなたの姉なんですよ。

青木 僕の前さん？

セツ子 そうです。

青木 じゃあ、何でいままで、嘘ついて、僕の妹だって言ってたんです。

セツ子 嘘なんてついてないわ。あなたが、かつてにそう決めただけなのよ。

青木 僕がかつてに？

セツ子 あなたは、ホントウは姉が欲しかったのよ。でもそれをいうのがあなたは、怖かったのよ。

青木 怖かった？

セツ子 そう。怖かったのよ。何故なら、それはホントウのことですからね。ホントウのことというのは、怖いことなのよ。

青木 ホントウのことが何故怖いことなんです？

セツ子 『おそろべき真実』ってよくいうじゃないの。

青木 そういうもんですか。

セツ子 ええ、だから、あなたは虚構の妹を作ったの。

青木 虚構の妹。

セツ子 でも、ホントウはね、あなたには、虚構の妹どころか、実在の姉すら存在しないのよ。

青木 え？

セツ子 けれども、ここは空想の世界だから、あなたのホントウの願望がこうやって、実現しているのよ。

青木 もう、何いわれてるんだか、分からなくなってきた。

セツ子 あなたの心の奥深くに、あなたの理想の姉さんが存在しているの。

青木 心の奥にですか。

セツ子 ええ、潜在意識、無意識というところにね。

青木 僕のですか。

セツ子 あなたは、女性に母を求めるのではなく、恋人を求めるのもなく、「姉」を求めているのよ。でも、それをおもて沙汰にするのは、怖いことだったのよ。だから、あなたは、カリエスで寝たきりの妹を想像で作ってしまったのよ。

青木 ほ、ホントかな。

セツ子 『おそるべき真実』よ。

青木 (分からないといったふう) はあ。

少年少女がもどる。

少女1 船医、薬が出来ました。

ケンジ うん、これさえ飲めば、熱は下がるぞ。さあ、セツ子さん、

飲んで。

セツ子 (飲む)

ユキオ 船長、船の行き先を命令して下さい。

青木 (気をとりなおして) コモモさん、周りの海を見て下さい。あ

なたのその見えない眼に、いったい何処に見えますか？

コモモ (言われたとおりにやってみる)

橋掛かりを例の雛壇がやってくる。

コモモ 灰色の盗賊団の船がやって来ます。

青木 何だって！

騒々しくなる少年少女たち。

カイ おい、そっちの船の名前は何だ？

青木 え？えーと、

オサム てきとうに。

青木 我が船は、ブースカ丸だ。

ユキオ おい、何だいそれは。

青木 快獣ブースカが好きだったんです。

カイ ブースカ丸か。身のほど知った名前だ。結構。ところで、君た

ち十一人の少年に問う。嵐を止めたのは、誰だ。

コモモ お前たちの仕業じゃないのか。

青木 ここから先の物語を、盗んでいったのはお前たちだろう。

カイ ほほう、だから、嵐もストップしたというわけか。

「そうだ、そうだ、物語を返せ」という、少年少女たち。

カイ 返してほしいのは、嵐のほうか、物語のほうか。

互いに顔を見合わせる十一人の少年少女たち。

カイ・・・答えられまい。君たちはある矛盾に気がついたのだ。嵐はもともと君たちの船出と、その行く末を阻むものだったのだぞ。君たちは、そんなものが、欲しいのか。

ユキオ しかし、それと、闘うことが物語なんだろう？

カイ そうさ、嵐は必要なものだったのだ。冒険ノベルスにしても、ファンタジイにしても、いや、ありとあらゆる想像力の造り出す物語には、たとえれば嵐が必要なのだ。それは物語の要でもあったのだ。つまり、嵐があるところから、物語は始まるのだ。ところが、これだ。嵐は消えた。

青木 だから、それは、お前たちが、

カイ ブースカ丸の十一人の少年少女に告げる。君たちは、物語のつづきを我々が盗んだと、ほんとうに信じているのか。おう、我々の仲間はずしに、作家のパソコン・ワープロに侵入し、データを全てダウン・ロードした。しかし、そこには、物語などひとつもなかった。そこにあったのは、この、嵐の消えた海の風景だけだったのだ。

コモモ 嘘だ。

カイ ならば、証拠をみせてやろう。おい、ヤツを連れてこい。

命令されて、ヒオイたちが動こうとするが、

より先にその「ヤツ」が橋掛かりに登場する。

ヤツ いいよ、俺のほうから出ていくから。

コモモ 誰、あんた。

青木 あ、あの時のエッチな客。

ベッポ 下手村さんじゃありませんか。

下手村 イカニモタコニモ、俺は作者の下手村だ。

カイ さて、聞こうじゃないか、作者本人に。いったい、この物語のつづきを盗んだのは、我々なのかい？

下手村 もちろん。

カイ まだ、しらばっくれる気なのか。いったい何を言い、ここでのこのこ現れた。

下手村 そうとしか考えられないからだ。ある日突然に、物語を紡ぐ想像力の糸がプツンと切れるなど、信じられるわけがない。

カイ どうだ、これが作者の繰り返す言い分だ。しかし、我々は侵入しこそすれ、いや、盗み出したことも認めるが、盗み出したモノそれ自体は、ただの灰、燃えカス、真っ白なる原稿、この波風ひとつない海だったというわけだ。

下手村 黙れ、きさまたちですら、俺の造り出した登場人物に過ぎないくせに。

カイ 聞いたか、少年少女たち。語るにおちるとはこの事だ。彼は彼の物語を盗んだという、我々の存在を否定しようとしているではないか。

下手村 馬鹿をいえ。俺は俺の紡ぎ出した糸に絡められて、繭の中に閉じ込められてしまったのだ。まさか、俺の造り出した物語の登場人物が、俺の物語そのものを盗んでしまうとは、思いもよらなかった。

カイ で、逃げ出したというわけだ。

下手村 嘘をいうな。誰が逃げるものか。きさまたちを追ったのだ。

カイ で、ついに追いついて、反対に我々に捕まったというわけさ。

アッハッハ。

下手村 自らの造り出したもの、考え出したものに、逆に拘束されて身動きとれなくされるのは、人間の思考の宿命だ。きさまたちと、俺こそがその象徴らしいな。

カイ ケツ。今度は論理に逃げ込む気だな。作家なら、書けない理屈をほざく前に、さっさと物語を書いてみせればどうだ。

下手村 その想像力を奪ったのは、誰だ。「思う」保険などという、熟れた人參をぶら下げやがって。うっかり、加入したおかげでのさまだ。

カイ そら、循環しはじめたぞ。「思う」保険を考えたのは、他なら

ぬ、作者であるお前じゃないか。

青木 あの、ディベートの最中に、割り込んで恐縮ですが、下手村さん、この物語のつづき、盗まれたのなら、たったいまから作って下さい。ここから、どうなるんですか？この海、どうするんですか。

下手村 分かるもんか。

青木 そりゃ、ひどい。

下手村 いったるじゃないか。盗まれたのは、俺の想像力だと。

カイ 言い訳をはじめたぞ。

下手村 聞く耳もつな。それが証拠に、私はここからその場所に、君たちのいるその虚構の場所に一步も踏み入れることが出来ないのだ。

青木 僕たちはどうすればいいんです。

下手村 それが考えられないから、俺はこちら側にいるんだ。

青木 いったいぜんたい、僕たちのいるこの虚構の場所というのは、何なのです？

下手村 それすら、俺には思い出せぬ。しかし、一つだけ憶えていることがある。目の見えぬ少女の娼婦に会ったことが、そもそも、

この物語を書ききつかけだった。

コモモ 私ですか。

下手村 思い出せない。

カイ 何れにせよ、書けなくなった作家にイカほどの価値があるろう。

イカほどでなく、もはやスルメってとこだな。

下手村 ちくしょう。よくも、俺の・・・くくくう。(泣く)

と、伏せていたセツ子が歩み出て。

セツ子 弟よ、君泣きたもうことなかれ。

下手村 その声は、・・・セツ子姉さん。

一同 「え?!」

セツ子 ええ、あなたの姉のセツ子です。

下手村 何で、そこに。

セツ子 (青木に) 青木さん、さつきは困らせてゴメンなさい。さっきの姉と弟の話は、みんな私とあの下手村とのことなんです。

青木 じゃあ、あなたは。

セツ子 はい、下手村の姉です。

下手村 書いた覚えはないぞ。俺は姉のことはこれまで、どんな作品にも書かなかった。なのに、どうして姉さん、あなたがそこに？

セツ子 この海は、静かですね。でも、平穏な海ではないわ。これは、エネルギーの殆どない海だわ。

ケンジ ええ、そうです。エントロピーが最大の状態を示しています。エネルギーが全く平衡な海です。世界が終焉している姿です。

セツ子 かつて古の船乗りは、荒れる海を鎮めるために、生贄として女をそのあらゆる波のはさまに投げ込んだと聞いています。

ユキオ そうです。それが理由で、船の名前はすべて女性名詞となり、その舳先（へさき）には、女性をかたどったシンボルの彫刻が掲げられたのです。

セツ子 では、私はまるで正反対のこととしてみましょう。
オサム 何をする気だ。

セツ子 この、エネルギーの無くなった海に我が身を投じて、エネルギーを、ええ、嵐を呼び起こしてみましよう。

音楽。

動揺する少年少女たち。

セツ子 弟よ、あなたが書けなかった物語のつづきを、そのつづきの始まりを、私が作ってみましよう。

下手村 駄目だ。そんなことをするな。

セツ子 悲しまなくてもいいのです。さっきもいったように、あなたには姉など実在しないのですから。

下手村 たとえ実在しなくとも、俺の心の奥深くに、ひたすら秘密に理想としてきた女性に、ここで死ねというのか。

カイ ほっほっほ。やりたまえ。面白いことになってきた。こうでなくて、我々にとつてもつまらない。

セツ子 私が、この海に身を投じて、さてそれからどうなるのか、それは分からない。けれど、やってみるわ。どうせ先のない命ですもの。

セツ子、ゆつくりと海に身を乗り出す。

セツ子 ああ弟よ君を知る 君泣きたもうことなかれ 末に生まれし君ならば 親のなさはまさりしも 親はペンを握らせて 文を綴れとをしへしや 文を綴って死ねよとてその齢までそだてしや 君泣きたもうことなかれ 虚構の城は滅ぶとも 滅びずとても

なにござ 君知るべきや姉などの この世に生まれし証なし
それが不在の姉ならば 姉自らは現にも ああ みずからは出で
まさね かたみに人をあざむいて けものの道に生きよとは そ
れを人のほまれとは もとよりいかで思わねど 君の思いしこの
姉は なげきの中にいたましく 君のしら髪はまさりぬる 君の
つくりしこの姉は 君の心の奥で泣く いちども添はでわかれた
る 姉のころを思いみよ この世にひとりの君ならで ああ
また誰をたのむべき されど愛しき弟よ 君泣きたもうことなか
れ 君の不在の姉なれど ここにさだめか あいみでの 末は久
遠のわかれとや あるいは永久の道行きや
カイ 痴楽、綴り方教室か、それは。(注・かつての落語家、柳亭痴
楽の得意芸)

セツ子 いざ、飛び込まん！ザッブーン！！

海に変化はない。

カイ 何の変化もないな。

セツ子、抜き手をきって橋掛かりの下手村のところ泳ぎつ
く。

セツ子 泳ぎついちゃった。

カイ 道理で何にもならんワケだ。

下手村 どうするんだ、姉さん。

セツ子 しようがないじゃない。飛び込んでも駄目だったんだから。

もう、この物語は忘れてしまいましょ。

下手村 変わり身が早い人だな。

セツ子 女の特権よ。

下手村 しかし、

セツ子 これからは、この不在の姉が、あなたの女になってあげるわ。

望みどおりに、あなたのパンツを洗濯して、ごはんを作って、夜
はひとつの布団で寝てあげる。

下手村 姉さん。

セツ子 もう、下賤な女なんて買う必要はないのよ。さあ、行きまし
よう。こんな空想だか想像だか、あってもなくてもいい世界から
足を洗って、コツコツと庶民として、長生きだけをしましようによ。
百歳過ぎまで生きれば、どんなに馬鹿でもゴーツクでも、悪人だ
ろうが何だろが、皆様から祝福されるのよ。ね、せつかくこう

やって不在が現実になったんだから。
下手村 信じていいんだろうか、こんな展開を。

カイ まあ、先行き、何の見込みもないフィクションだからな。もう、お前には用はないよ。その不在の姉とやらと一緒に消えてしまおうがいいや。

下手村 じゃあ、そうしよう。

セツ子 あら、あなたも変わり身早いのね。

下手村 作家の特権さ。

二人して、橋掛かりを去る。

青木 なんて素早い決断なんだ。

ユキオ おまけにふざけた、決断だ。僕たちは、いったいどうなる。

少年少女、口々に不平不満。

カイ まあまあ、そういうことさ。これでよく分かったろ。我々が物語のつづきを盗んだわけでもなく、作者の想像力を奪ったわけでもないということがな。もとより、ヤツの想像力など枯渇していたというわけだ。

オサム 新三郎は、お露と供に去りぬか。残るは下駄の音ばかり、カランコロンと。

青木 それって、ゲゲゲの鬼太郎ですか。

オサム おいおい、牡丹燈籠の話だよ。

ケンジ どうしましょう、船長。

青木 僕が決めるんですか。

ユキオ ともかくも、君が船長だからね。

青木 でも、作者に二度もトンズラされて、いったい、物語の中の僕たちに、何が出来るといいますか。

コモモ いいえ、出来ませぬ。出来るよ青木さん。

青木 コモモさん。

コモモ 私、青木さんにいわれたように、もう一度、この海の向こうに何が見えるか、この見えない眼で見えます。きっと、進む先が分かるはずですよ。

少年少女たち 「そうだ、そうだ」と拍手。

今度は、コモモが海に飛び出る。

青木 頼むぞ、コモモくん。
少年少女たち 頼むぞ、コモモ！
カイ それも叶わぬ望みだな。それっ。

灰色の盗賊団たち、コモモを羽交い締めにして。

カイ (コモモに近づくと、その眼鏡を取る)

コモモ 何するんだ。

カイ 何をされるか、その眼で見るがいい。このニセめくら。

コモモ えっ。

カイ (ポケットから剃刀を取り出す)

コモモ あっ。(と、眼を開く)

少年少女たち ああっ！

カイ よく分かったか。眼が見えぬなどとは真っ赤な嘘。同情をひいてか、あるいは変態趣味の輩の欲望を満足させてやるためか、目の見えぬふりをして客を引いていたことくらい、こっちはお見通しだ。

青木 コモモさん。

コモモ 違う、違うんです、青木さん。そんな女じゃないんです。

音楽。

コモモ、盗賊団を振りほどくが。

青木 眼は見えたんですね。

コモモ 青木さん、これには、ワケが。(その場に崩れる)

カイ ワケがも腋臭もあるもんか。

コモモ すいません、すいません、嘘ついて。ええ、そのとおりです。

私の眼は見えるんです。でも、兄さんと、兄さんとふたりして、
この人生の並木道。

その兄が今度は橋掛かりに。

兄 コモモ、何やってんだ、この多忙な夕暮れ時に。

コモモ 兄さん。

兄 そんなヤツラとつきあっちゃ駄目だ。駄目になっちまうぞ。こっちへもどって来い。

カイ 姉さんの次は兄さんときたな。こりゃあ、何だい、フロイトとユングの心理学の講義かい。

兄 コモモ。

コモモ、疾風のように立ち上がり、カイの手から剃刀を奪うと。

カイ 何をする。

ヒオイ・トモズミ 危ない、カイさま。

音楽。

コモモ 『見るために両眼(め)をふかく裂かむとす剃刀の刃に地平をうつし』・・・騙してはいけません。でも、この剃刀の刃にうつるべく地平を、今度こそきつとほんとに見つけます。きつと、この眼で。(剃刀で、瞼を切り裂く)

音楽、どっぱーん。

少年少女たち (悲鳴と、驚愕の声)

青木 コモモさん！

シンとして。

剃刀がスローモーションで床に落ちる(なこと、出来るわけないか)

その金属音。

音楽、ぐおおんと。

溶暗。

5

あの場所に青木が立っていて、科白をつぶやいている。その後方、あの場所にコモモ。

コモモ それから、どうなるんですか？

青木 え？(ふりむく)

コモモ それから、その話、どうなるんですか？

青木 ええ、それが、ここから先が無いんです。やっとの思いでここまで作って見たんですが、とにもかくにも、作者に逃げられて。あ、こんな話したって仕方無いですね、見ず知らずのあなたに。

コモモ いつも聞いてますよ。

青木 ああ、何だか、そうでしたね。

コモモ つづき、聞かせてほしいな。

青木 ええ、僕たちも、そう思って毎日毎晩、ああでもないこうでもない、考えてはいるんですが、まったく見当がつかなくて。

コモモ 青木さん、 π って知ってますか。(近づいてくる)

青木 えっ(どぎまぎして)そ、そんないきなり、オッパイを触れなんて、ぼ、僕は。

コモモ そんなこと、誰も言っちゃしません。 π です。

青木 円周率の π ですか。

コモモ 円の面積の求め方は？

青木 πr^2 の二乗です。 r ってのは、円の半径です。

コモモ そうですよ。ね。 πr^2 ですよ。すると、半径 r が1の円の面積は π ということになりますよね。

青木 πr^2 で r が1なら、計算の上ではそうなります。

コモモ ですから、 π には円周率とは別に、こういう約束があるんです。『半径が1の円の面積を π とする』 $\cdot \cdot \cdot \pi$ って、半径1の円の面積なんですよ。

青木 へーえ、そうなんですか。 π ってのは、面積ですか。へーえ、そうだよな、 πr^2 が面積だもん。 r が1なら面積は π だよな。

へーえ、コモモさん、頭いいですね。

コモモ このあいだ、数学の教師の相手したもんだから。その人、早漏をくいとめるのに、算数の話しながら、やるんだもん。

青木 (変に感心して)はーあ。

コモモ で、その答えが、未だに分からない。

青木 そうですね。(円周率をつぶやきはじめる) 3. 1 4 1 6 . . .

コモモ 半径1の円の面積ですら、人類には、未だ分からないんですね。優秀なコンピューターが、二十四時間休みなく計算をつづけているのに、まだ答えが出ないんですね。

青木 はい。そう聞いてます。

コモモ 青木さんのやってるお芝居の物語って、まるで、その π みたい。

青木 ああ、そう言われれば、そんなふうにも思えます。

と、いつの間にか、カイたちが在る。

カイ では、円の面積は無限なのかというと、そうではない。そんな

ことは、常識で分かることだ。円は閉じられた平面だから、無限であるわけではない。では、いったい、 π の計算は、どの辺りであたかも永遠であるかのような顔をしているのか、考えたことがあるか。お二人さん。

青木 あなたは？

カイ （それには答えず）いったい円の中と外を分かつモノとは何だ？一本の曲線ではないか。では、線というモノは何だ。線には面積がない。あれば平面になってしまうからな。では、線とは何だ。点の集合だ。無論、点にも面積は無い。線は面積のない点の集合だ。しかし、そのような、あつてないような、漠然としたシロモノに、果たして円の中と外を隔てることが出来るのだろうか。青木 しかし、ちゃんと、こう円は丸く（と、指で円を描く）カイ 円が無限といわれる根拠は案外、境界のあいまいさにあるのかも知れないな。

青木 じゃあ、円は、その面積、 π は？

カイ π とは、この宇宙の半径を1と見立てたところの、宇宙の全面積だ。

青木 全宇宙の、面積？

カイ そんなものが、計測可能だろうか。

青木 あなた、何者なんです。

カイ コモモ。本名ムニヤムニヤ・コモモ。売春容疑で逮捕する。

ヒオイとトモズミ、コモモの肩を捕まえる。

コモモ （慌てず騒がず）刑事さんだったんですか。

カイ 兄さんなら、先に捕まって留置されている。なあに、重い罪じゃない。

コモモ ……はい。（顔を伏せた）

青木 コモモさん……

コモモ いつまでも、つづけられる仕事じゃないって思ってたから。

カイ 心配するな。情状酌量ということもある。いまならまだ少女Aですむ。連行しろ。

ヒオイ・トモズミ はい。

コモモ （連れられて歩き出すが、歩を止めると）青木さん、それから、どうなるんでしょう。

青木 え？

コモモ あの物語ですよ。『十一人の少年』ですよ。あの、それから、ですよ。

青木 あの、それから、それから。．．．

カイ (高笑い) ハッハッハ。青木くん、君も想像力を奪われたか。

青木 何だって？

カイ かくも簡単に、人間の想像力が消失してしまうとは、我々にすら思いもよらなかつた。それを我々のせいにするのもいいだろう。しかし、我々としてこれでは、おマンマの食い上げだ。

青木 何なんだ、お前。

カイ 何だと思う？

青木 刑事じゃないのか。

カイ いいや、刑事かも知れぬ。しかして、灰色の盗賊団かも知れぬ。

青木 ちょっと待て。教えてくれ、ここは、ここは物語の中なのか外なのか！

カイ ここは、半径が1の円の世界さ。

音楽。

青木 コモモさん、僕は。

コモモ (努めて冷静に) 青木さん、それから、それからどうなるんです？

青木 分からない。僕には分からない。

コモモ 考えて。考えてください。お願いします。

青木 (頭を抱える)

カイ 連れていけ。

ヒオイが、コモモを連行して去る。

青木 (頭を抱えつつも必死で) それから、それから、すでに嵐の静まった海で、十一人の少女少女を乗せたブースカ丸は、行くても分からず、ただじっとしていました。どのみち還る道筋とて分かるわけがなく、そこで、船長はこう言いました。(ゆっくりと顔をあげる) 「行こう、進もう、近づこう」．．．。

どこからか、少女少女たちの「オオウ！」という雄叫びが聞こえる。

青木 ともかく、行こう、進もう、近づこう。

カイ 死ぬことは簡単だ。生きるのは難しい。だから人間は生きる。なんと、矛盾した生き物だ。それゆえに、生きることは謎々だ。

死は絶望か？もし、死が絶望であるならば、如何なる人間も絶望に向かつて進んでいることになる。では死は希望か？ならば、現にここに生きている理由はない。死ねばそれでこと足りるからだ。いずれにせよ、生きる理由など見つからぬ。しかし、それゆえに人は生きる。なんとというパラドクスな生き物だ。お前たちこそが、宇宙で最大の不思議だ。

青木 あなたは、もしかして。

カイ 分かったかい、我々の正体が？

青木 分かりました。いまハッキリと分かったぞ。

カイ じゃあ、終演後のアンケートに『あのカイや盗賊団の正体って何なんですか、教えて下さい』なんて書くんじゃないぞ。

トモズミ 参りましょうか。

カイ ああ。

トモズミ この先どうしましょう。もう「思う保険」は売れそうにありません。

カイ よし、今度はもっと具体的に「夢叶う保険」にしよう。

トモズミ 「夢叶う保険」それ、ダイレクトでいいですね。

カイ これくらい直接的でないと、世間には通用しない。

トモズミ はい、仰せのとおりです。

カイ あなたの夢を預けませんか、一年満期で叶えてお返しいたします。これが、キャッチ・コピーだ。

トモズミ ほんとに夢を叶えてやるんですか？

カイ いやいや、一年たったら、こういうんだ。

トモズミ 分かりました。こうでしょ。『お客様、まだまだあなたの夢は小さいですよ。どうです、これを元金にして、もっと大きな夢をお預けになったら？』

二人、笑う。そうして去っていく。

青木 それから、それから、海は、海は、ただ静かでしたが、船は、ブースカ丸はその海を、しかし、しかし、ただただ進んで行くのでした。

カイ (橋掛かりに立ち止まって、独り言のように) 往く者よ往ける者よ まったき 往く者よ往ける者よ 汝に幸あれ。(ゆつくりと青木にふりかえる)

青木 コモモさん、船長命令です。この海の間こう、何があるのか、その見えぬ眼でしかと見て下さい。僕たちは、見えないあなたの眼が見たものへ進みましょう。それは僕たちには見えない「それ

からの物語」に違いないのです。しかし、きっと僕たちにも見えないはずのそれからの物語なんです。そうなんです、めくらなのは、僕たちだ。コモモさん！

海がうねりだしたかも知れない。

音楽。

1995. 10. 16 初稿脱稿

作中、寺山修司さんの短歌を（『田園に死す』より）一首、引用いたしました。

上演データ

一九九九年

十月二三日〜二四日

AI・HALL

十一月五日〜七日

天白文化小劇場

十二月三日〜五日

シアタートラム

スタッフ

舞台美術

北村想 永井優二

照明

石原福雄 安藤昇益 寺岬めぐみ

作曲・音響

ノノヤママナコ 細川ひろめ

衣装デザイン・製作

石田佳代子

小道具

金原祐三子 富田亜希

舞台監督

永井優二 小林隆朗

宣伝美術

下東英夫

イラスト

あおきひろえ

イラスト撮影

藤井誠 (スタジオテック)

写真

柏本勝成

制作

樫耕治

制作協力

劇団21世紀FOX 津村卓 小堀純

企画・製作

プロジェクト・ナビ

キャスト

コモモ

加藤利恵

青木

段丈てつを

灰色の盗賊 1

大地亜矢子

灰色の盗賊 2

木村庄之助

灰色の盗賊 3

井上美穂

オサム

富田亜希

ユキオ

中島由紀子

ケンジ

田中知砂

ベッポ

千葉ペイトン

カイ

佳梯かこ

トモズミ

中西康一朗

ヒオイ

田辺文美

灰色の盗賊 4

灰色の盗賊 5

コモモの兄

『十一人の少年』の少年・少女たち 1

『十一人の少年』の少年・少女たち 2

『十一人の少年』の少年・少女たち 3

『十一人の少年』の少年・少女たち 4

セツ子

下手村象

鈴村圭子

あべかずえ

川本貴浩

大地亜矢子

木村庄之助

井上美穂

土居辰男

金原祐三子

小林正和

